

奥野武俊

Interviewer

進研アドBetween編集長
長田雅子

学域制によって実現する「垣根のない学び」が新しい価値を生み出す

高度研究型大学をめざし、2012年度から学域制へと学びの体制を変更する大阪府立大学。公立大学協会会長も務める奥野武俊理事長・学長に、今後の公立大学のあり方とともに、大阪府立大学の改革状況と今後の展望を聞いた。

持続的発展につながる公立大学の多様性

長田 貴学の改革など、いろいろと意欲的に取り組んでいることをうかがいたのですが、まず、2011年度に就任された公立大学協会長のお立場から、協会がこれから取り組むべき課題について、お聞かせ願えますか。

奥野理事長・学長(以下奥野) 協会が公立大学の「プレゼンスの向上」を第一の使命と考えてきました。現在、全国には81の公立大学があり、大学数では国立大学と並ぶ状況になっています。しかし、国立大学や私立大学に比べて、大きな存在感を示しているとは必ずしも言えません。

当然ながら公立大学にも、国立大学や私立大学と同様に、日本の高等教育を担う責任があります。ここ数年間に各大学で行われてきたさまざまな取り組みを通して、存在感は増していると考えています。今後も引き続き、公立大学独自の成果発表や情報発信を積極的に行い、中央省庁をはじめ関係機関への働き掛けを強化して、さらなるプレゼンスの向上に取り組んでいきたいと考えています。

長田 国立大学や私立大学とは異なる、公立大学固有の課題にはどのようなものがあるのでしょうか。

奥野 公立大学を設置・運営している地方自治体の首長や議会の意向が大学運営に及ぼす影響は非常に大きいものがあります。また、運営方式や規模、設置理念にそれぞれの大学の特徴があり、「多様性がある集団」と言えます。私は「多様性のある組織は持続可能であり、新しい価値を生み出すことができる」と思っています。多様性を重視

して、それを公立大学共通の課題として受け止め、さらに発展させていきたいと考えています。

東日本大震災後、8、9月には、公立大学協会として学生ボランティアを被災地へ派遣しました。10月にはシンポジウムを実施し、成果報告の場を設け、学生たちによる活発な意見が交わされました。震災によって、社会の価値観は変化しつつあります。そういった変化を大学教育の中に取り込んでいく必要があると考えています。

総合的・多角的な視野を持つ人材を育成

長田 貴学が現在進められている学域制への移行と、そこでめざす学びについてお聞かせください。

奥野 「高度研究型大学～世界にはばたく地域の信頼拠点～」を大学のめざす姿として掲げていますが、これは、研究と切り離すことのできない教育を通して世界にはばたく学生を育てる大学になることを意味しています。その結果、当然のこととして地域の信頼を得ることができると考えています。

そのために、本学では学部学科の連携を強め、複合領域の学びを本旨とした「学域制」を、2012年度からスタートさせます。これまでの7学部28学科を4学域13学類に変更します。

特に情報・環境・マネジメントをキーワードにした複数の学問領域にまたがる現代システム科学域はこの体制を象徴する学域で、担当する教員は全学部から選ばれています。現代システム科学域では、専門を重視しながら、その基礎となる科目を広く履修しなければ卒業できないようにしています。現代

のビジネスの場で求められているのは専門ばかりでなく、物事を総合的かつ多角的に見ることができるシステム思考を持った人材であると考えているからです。

この学域をつくる起点となったのは、いち早く学際的な学びを取り入れてきた大学院における取り組みの成果でした。専門を重視した研究に異分野の視点が入ってくれば、新たな課題の発見につながり、研究をより深く実用的なものへと高めていくことができます。院生たちは経験を通して、この重要性を把握し、最近では院生自らが「異分野の会」をつくってその取り組みを進めています。私は、このような学びの実践を、学士課程教育にも適用できないかと考え、それを実現させるために学域制を採用し、現代システム科学域をつくりました。

学域制では、さまざまな動機と学力を持った学生に、まず専門の基礎を幅広く学んでもらいたいと考えています。学ぶ意欲を持った学生のためには、いくつかの学びのオプションを設けています。例えば副専攻プログラムですが、これを取れば、学びの負荷はかなり重くなります。副専攻プログラムは、意欲と覚悟を持った学生に選択してもらおうつもりです。ここでの学びを通して、大学院に進むことを希望する学生には、大学院で専門を深めてもらいます。

一方で、新入生の中には、本当に何をしたいのかわからずに入学者も多く存在します。学域制は、そうした学生を受け入れることも前提にしています。例えば、異なる学域の学生がディスカッションなどを通して主体的に学ぶ「初年次ゼミナール」を実施して

学びの転換を体験させ、2年次以降に専門を選択できる「経過選択型」を採用しています。

長田 このように学びの体制を変えることを、高校にはどのように伝えているのでしょうか。

奥野 高校・予備校の教員や生徒を対象にした説明会を数多く実施しています。教員も生徒も、われわれの新しい試みに理解と興味を示してくれますが、進学指導教員の理解を得るのが最も難しいのかもしれない。「新しい学域学類は、従来の学部学科ではどれに当たりますか」とよく聞かれます。学域学類は単なる学部学科の置き換えではなく、もっと複合的な学びをするためのものであり、その真価を理解してもらう努力が必要だと思っています。

例えば、「将来、行政の道に進み環境問題を担当することになったら、単に環境問題に詳しいだけでは務まりません。総合的かつ多角的に問題を把握するには、哲学や倫理学、それに法律も経済学も学んでおくべきでしょう？」と言うと、よく理解してくれます。私はこのような学び方を「垣根のない学び」と呼んでいます。



おくの・たけとし 1946年生まれ。大阪府立大学大学院博士課程修了後、イギリス・リバプール大学客員研究員、大阪府立大学工学部教授、同大学院工学研究科長、理事兼総合教育研究機構長などを歴任し、2009年から現職。工学博士。専門領域は海洋システム工学、海洋環境、船舶工学、流体力学。

周辺地域を巻き込んだ知の拠点をめざす

長田 貴学は「創基130年」を2年後に控えています。この節目に向けてどのようなことをお考えですか。

奥野 大阪のミナミの中心地、難波に1年後、南海電鉄の本社が入るビルが移転します。そのビルのフロアを借りて、公開講座や同窓会の拠点にしたいと考えています。近隣には南大阪地域大学コンソーシアムもありますから、多くの大学と共に南海電鉄沿線の知のポテンシャルを高めていくための拠点としたいと思います。

もう一つは、国際化へのチャレンジです。現在、留学生数は大学全体で200人程度ですが、将来は少なくともクラスに2、3人は留学生がいる状況をつくりたいと考えています。ハード面では、留学生を迎え入れる国際交流会館を造る計画です。そこには日本人学生もルームシェアのような形で一緒に住ませたいと思います。先ほど、多様性を重視していることをお話ししましたが、人的な面においても、多様性を確保したいと考えています。